

聖書:ルカの福音書16章19~31節

説教: モーセと預言者たちに耳を傾けないのなら

はじめに

イエスはパリサイ人が聖書の神と強欲の神、この二つの神に仕えていて、それはまっぴらで姦淫の罪を犯すのと変わらない。そのように警告しました。それが前回までのあらすじでした。

今日はその続きで、ここでまた新たなたとえ話が始まります。貧しい者は死んで天国に迎えられ、金持ちはハデスというところで苦しむ。ああ、そうか。あの金持ちのようにならないように、あなたがたは生きている間に良いことをして死んだ後のことに備えなさい。そんな話しかとも思ったかもしれませんが。仏教にも善行を積むとか徳を積むということばがあって、それとよく似ていますが、本当はどんな話だったのか。少しずつ考えていきます。

## 1 ラザロ

### 1) 犬でさえあわれんだ

19, 20節を読みます。「ある金持ちがいた。紫の衣や柔らかい亜麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。その金持ちの門前には、ラザロという、できものだらけの貧しい人が寝ていた。」

このラザロのできものを、犬たちもやって来てなめていたとあります。どうして、イエスはこの場面を加えたのかと考えます。ラザロの置かれた状態が家畜同然だった、ということかもしれません。あるいは、犬でさえラザロのことがかわいそうに思い、それでおできをなめてあげた。それほどラザロの状態が悲惨だった。そのことを言いたかったのではないのでしょうか。というのは、犬に比べて金持ちはどうだったのか。そのことが浮かび上がるからです。ラザロが自分の屋敷の門の前に座っています。それなのに目に入りません。自分には関係ないからです。犬でさえラザロに関心を寄せたのに、金持ちはなんの関心も示さなかった。それがこのたとえ話の一つのポイントです。

### 2) アブラハムの懐へ

そのラザロは、死んだ後、アブラハムの懐に連れて行かれ、そこで慰められていきます。「アブラハムの懐」とはなにか。少し説明が必要でしょう。このたとえ話をパリサイ人たちが聞いていたことを思いだしてください。彼らが熱心に読んでい

た旧約聖書の創世記15章に、神がアブラハムを天幕の外に連れ出してこう言われた場面があります。

「さあ、天を見上げなさい。星を数えられるなら数えなさい。あなたの子孫はこのようになる。」

(創世記15章5節) パリサイ人たちを初めとするユダヤ人は、ここを根拠にして自分たちの父はアブラハムであると信じています。イエスご自身も別の箇所、天の御国の食卓にはアブラハムも座るということを語っています。

ですので「アブラハムの懐」とは、神に救われた者が死んだ後に迎えられ、すなわち神の国と言っていいでしょう。地上では満足に食べることもできなかったラザロでしたが、いまは天の御国に迎えられ、豊かに神の国の食卓で満ち足りています。

## 2 金持ち

### 1) さばき

ところがもう一方の金持ちはどうなったか。「アブラハムの懐」ではなく「よみ、ハデス」と呼ばれるところに連れて行かれ、炎の中で苦しんでいます。この「よみ、ハデス」とはいったいなんであるか。詳しいことはわかりませんが、死んだ後に、ある人たちが行く場所であるらしいことはわかります。人は死んだ後、ある者は「アブラハムの懐」すなわち神の御国の食卓に招かれるけれど、そうでない人たちは「よみ、ハデス」と呼ばれる炎の中に投げ込まれて苦しむことになる。これを聖書では、「さばき」と言っています。さばきと聞くとなんだか恐ろしく思えるかも知れませんが、ラザロように、この地上で不幸な人生をあゆんだとしても、やがて報われるという希望があるわけですから、むしろ喜ぶべきことです。

### 2) 生きている間

とは言え、自分はどうちに行くのだろうかと急に不安に思われたかもしれません。どうしたら天の御国に行けるか。そのことが気になります。そのヒントが25節にあります。「するとアブラハムは言った。『子よ、思い出しなさい。おまえは生きていた間、良いものを受け、ラザロは生きていた間、悪いものを受けた。しかし今は、彼はここで慰められ、おまえは苦しみもだえている。』」

生きている間に何を受け取ったか。それによって神の国に行くのか、ハデスに落とされるのかが決まる。そんなふうに読めます。『そうか、貧しい者は救われて天の御国に行ける。でも、金持ちは救われていないのでハデスというところで苦しむことになる。』そんなふうにしたかもしれない。いいでしょうか。何度も言いますが、貧乏人は救われて、金持ちは救われないというような話ではありません。ではどんな話なのか。そのことを見ていく前に一つだけ確認しておくことがあります。

### 3) 乗り越えられない淵

今、「さばき」のことを言いました。そのさばきは変更される可能性があるのかどうか、です。「地獄の沙汰も金次第」ということわざがあるくらいで、もし閻魔大王様の気分次第でさばきが右にも左にもころりと変わってしまうと言うのなら、地上で生きている間、どんな生き方をしようがどうでもよいということになってしまいます。でもここに書いてあります。神の国とハデスの間には大きな淵があって、絶対に乗り越えて渡ることができない。つまりさばきは絶対に変更されないと書いている。

## 3 アブラハム

### 1) 彼らにはモーセと預言者がいる

そのことを知らされた金持ちは、27, 28節でこう言います。「父よ。それではお願いですから、ラザロを私の家族に送ってください。私には兄弟が五人いますが、彼らまでこんな苦しい場所に来ることがないように、彼らに警告してください。」

ところがアブラハムはこう答える。29節。「彼らにはモーセと預言者がいる。その言うことを聞くがよい。」私たちがいま旧約聖書と読んでいるものを当時は、「モーセと預言者」と呼んでいました。ですから言い直すとこんなふうになります。「わざわざラザロを送らなくても、あなたがたはすでに旧約聖書を読んでいきますよね。そこに書いてあることをよく読んで守れば、神の国に迎えられます。」

これに対して金持ちは30節でこう答えます。「いいえ、父アブラハムよ。もし、死んだ者たちの中から、だれかが彼らのところに行けば、彼らは悔い改めるでしょう。」この金持ちも五人の兄弟たちも、ユダヤ人として聖書は読んでいたはずで、しかし残念ながら悔い改めることはできなかった。それで死んだ者のなかから誰かを遣わして、兄

弟たちを説得して欲しい。そうすればきっと悔い改めてくれて、自分のような苦しみにあわないで済むに違いない。そう考えた。

### 2) たとえ死人の中から生き返っても

アブラハムの答えはこうでした。31節。「モーセと預言者たちに耳を傾けないのなら、たとえ、だれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。」

ここに「だれかが死人の中から生き返っても」と、まるで自分とは関係ない他人事のように言っていますが、いったいだれのことですか。おひとりしかいません。イエスです。そうするとこのたとえ話は、まるっきりと作り話ではなく、他人事を装いながら実はご自分のことを語っていたのだと気がつきます。

そんな視点を持って、もう一度たとえ話を振り返ってみましょう。二つっぼいん咎あります。一つ目。金持ちは、アブラハムの懐に入るラザロを私の家族に送るようにと頼みました。ではイエスはどうかされましたか。父なる神の懐におられました。私たちがのところに來られて、神の国の福音を語り、罪を告白して悔い改めるようにと警告しました。しかしパリサイ人たちは、そのことばを受け入れず、かえってイエスを十字架に追いやり殺して、信じようとしません。

二つ目のポイント。たとえ話の金持ちは、死んだ者たちの中からだれかが行けば兄弟は悔い改めるだろうと言いました。では、イエスがよみがえられたとき、パリサイ人は悔い改めたのでしょうか。いいえ。なお心を頑なに信じてしようとしません。それどころか、イエスが葬られた墓が空っぽであるとわかると、自分たちが不利にならないように、イエスのからだは盗まれたのだと嘘の情報を流すようなことをしていきます。

こうして見てくると、この金持ちが願ったことは、実はすべてイエスによって実現していたことに気がつきます。

### 3) 金持ちに欠けていたこと

このたとえ話はイエスご自身のことであり、またパリサイ人たちのことでもあった。そこまではわかりました。でも、もっとも知りたい問題がまだ残っております。この金持ちは、どうして神の国に入ることができず、「よみ、ハデス」で苦しむことになったのか。私たちがそうならないためにはどうしたらよいか。そういう疑問です。その答え

を聞くまでは家に帰れない。そう思っているで  
しょうか。

最初に触れました。犬でさえラザロをかわいそ  
うに思いました。犬ですからなにもできないけれ  
ど、せめてものこととして、おできをなめてあげま  
した。ところが金持ちはラザロのためにいろいろ  
ことができたはずなのに、彼のことは目に入りま  
せんから何もしない。果たして、それは正しいこと  
だったのか。イエスはそのことを問いかけていま  
す。

このことを考えるヒントが、ルカの福音書10章  
25節辺りにあります。ある律法の専門家が「何を  
したら永遠のいのちを受け継ぐことができるか」  
イエスに尋ねると、イエスは「聖書に何と書いてあ  
るか」と逆に質問します。律法の専門家は「あなた  
の隣人を自分自身のように愛しなさい」と書いて  
あると答えました。イエスは「それを実行しなさい  
。そうすれば、いのちを得ます」と答えます。そ  
ういうくです。

あの金持ちにとって、隣人とは誰だったので  
しょうか。彼は、自分のように金持ちで世の名声  
があり、人々に尊敬されいてるたちこそ隣人だと  
思っていたのでしょうか。しかし聖書は教えていた。  
あなたの隣人はラザロだった。けれどもこの金持  
ちは、ラザロをかわいそに思うこともなく、隣  
人を愛することはしなかった。なぜ金持ちが「よ  
み、ハデス」に落とされたのか、これではつきり  
しました。

では私たちはどうすればよいのでしょうか。あなた  
の隣人を自分自身のように愛しなさい。口で言う  
のは簡単です。しかしこれがいかに難しいか、みな  
さんよく知っています。人を愛せない自分に気がつ  
くたびに、私は天国には入れないと悲しむことが  
あります。

では、イエスは何か難しいことを私たちに要求  
したのでしょうか。いいえ、私は隣人を愛する愛が  
ない人間です。正直に告白するだけです。それが神  
を愛することになる。安心しなさい。あなたは神  
の国に招かれている。あなたができなかった代わ  
りにイエスがすべてのことを成し遂げてくださるか  
ら。主はそのように語ってくださいます。

主の御名をほめたたえます。